「徂徠訓」との出合い
――リーダーシップの原点

雇用政策委員長
三井化学会長
淡輪（たんのわ） 敏（つとむ）

以前、当社の大牟田工場に人事課長で赴任した時のこと。時々立ち寄っていた料理屋の女将からいきなり「あんた徂徠訓（そらいくん）て知っとるね」と聞かれ、驚いて「荻生徂徠の名前は知っとるが徂徠訓は知らん」と答えると「なかなか素晴らしかけん読んでみんね」と渡されたのが徂徠訓との出合いであった。ご存じの方も多いと思うが、短いので以下に記す。

1 人の長所を始めより知らんと求むべからず。人を用いて初めて長所のあらわるるものなり。
2 人はその長所のみ取らば即ち可なり。短所を知るを要せず。
3 己が好みに合う者のみを用うる勿れ。
4 小過を咎むる必要なし。ただ事を大切になさば可なり。
5 用うる上は、その事を十分に委ぬべし。
6 上にある者、下の者と才知を争うべからず。
7 人材は必ず一癖あるものなり。器材なるが故なり。癖を捨てるべからず。
8 かくして、よく用うれば事に適し、時に応ずるほどの人物は必ずこれあり。

以上の八か条であるが、人の長所を活かし、任せきる姿勢が強調されている。

一見当たり前のことが書かれているが、これを実践するのは難しいと強く感じた。これは社内でもぜひ広めようと身近なところから伝えていったが、特に2014年に社長に就任した時に社内向けに以下の内容で周知を図った。

・組織の「風通し」が良いと社員が明るくなり、明るいところに人と情報が集まりやすくなる。そしてそれがツキを呼び込むことにつながっていく。
・組織の風通しを良くするには、皆さんが徂徠訓に書かれている内容を参考に、自分の組織への取り組み方を考えてもらいたい。

このことが当社の組織風土にどう影響したかはわからないが、大牟田の女将のひとことから始まった「徂徠訓」との出合いは、自分のリーダーとしてのあり方について考える大きな契機になった。また、江戸徳川の綱吉の時代の儒学者である荻生徂徠の思想が色あせないことに感銘を覚える。